

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520487

研究課題名(和文)ゲルマン語における文法範疇の発展パターンと個別性

研究課題名(英文)Patterns and Individuality in the Development of Grammatical Categories in Germanic Languages

研究代表者

嶋崎 啓 (SHIMAZAKI, Satoru)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：60400206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：ゲルマン語の中で完了形の発達に違いがあるのは、動詞のアスペクトの違いによる。すなわち、英語の動詞は完了相の意味が強いため、be + 過去分詞は動作受動をも表し、またそれに連動してhave + 過去分詞は間接受動の意味を強く持つ。その結果have + 過去分詞は完了形として発達しにくかった。動詞のアスペクトが非完了相に傾いているドイツ語においては一般的な受動態はwerden + 過去分詞が表し、sein + 過去分詞は状態受動にとどまった。そのためhaben + 過去分詞は間接受動としては発達せずに完了形として発達した。

研究成果の概要(英文)：It is based on the difference in the verbal aspect that development of the perfect form has a difference in Germanic languages. That is, since the English verbs tend to have a perfective aspect, 'be' + past participle also expresses a actional passive, in parallel with it 'have' + past participle can function as a indirect passive. As a result, 'have' + past participle did not develop easily as a perfect form. In the German in which the verbs tend to have a imperfective aspect, 'werden' + past participle developed as the usual passive, and 'sein' + past participle remained the statal passive. Therefore, 'haben' + past participle did not develop as the indirect passive, but as the perfect form.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：独語学 ゲルマン語

### 1. 研究開始当初の背景

インド・ヨーロッパ語の歴史的变化において一般的な傾向として総合的構造の衰退と分析的構造の発展を挙げることができる。ゲルマン語における受動態もその一例であり、ゴート語(4~6世紀)には語尾変化による総合的な受動態も残っているが、*wisan* (= *sein*) + 過去分詞、*wairpan* (= *werden*) + 過去分詞の二つのタイプの分析的な受動態の方がすでに多数派となっており、分析的な構造が発達していることが分かる。分析的な受動態の二つのタイプのうち、ドイツ語では *wairpan* (= *werden*) + 過去分詞のタイプが発達し、英語では *wisan* (= *be* = *sein*) + 過去分詞のタイプが発達した。ドイツ語では確かに *sein* + 過去分詞も受動を表す形式として用いられるが、その過去分詞は主格主語の状態を表す述語的形容詞にすぎない。それに対し、*werden* + 過去分詞は、*Hier wird getanz.* のような非人称受動文の存在からも分かるように、一語ずつに分解しては意味が成り立たない、一つの文法範疇を表す形式になっている。一方、英語では *weorpan* (= *werden*) + 過去分詞という形式は14世紀頃に消失した。なぜドイツ語で *wairpan* + 過去分詞のタイプが発達し、英語で *wisan* + 過去分詞のタイプが発達したのかはこれまで明らかにされてこなかった。

### 2. 研究の目的

文法範疇の歴史的發展のパターンと言語間の差異をドイツ語、英語、アイスランド語の3言語の比較を通じて考察する。その際中心に置かれるのは、受動態と完了形の歴史的發展である。この二つの文法範疇における分析的構造の発達には連動していると考えられるからである。ドイツ語、アイスランド語、英語を取り扱う理由は、同じゲルマン語でありながら、英語では語尾変化が大きく衰退したのに対し、アイスランド語では非常によく保持され、ドイツ語では両言語の中間のレベルで衰退したためである。この語尾変化の衰退において三つの異なる段階を示す言語の比較を通して、文法範疇の発展の均一性と差異を明らかにする。

### 3. 研究の方法

アイスランド語のテキストから受動態や完了形の用例を収集し、その用法を明らかにする。特に、*vera* (= *sein*) + 過去分詞がどのくらい状態受動ではなく動作受動として用いられているか、*verða* (= *werden*) + 過去分詞の使用頻度はどのくらいか、結果状態を表さない *hafa* (= *haben*) + 過去分詞や *vera* + 自動詞の過去分詞の例がどのくらい現れるかを明らかにする。その上で、ドイツ語および英語との比較を行い、受動と完了の文法範疇の使用領域の相互関係が認められるかを検証する。

### 4. 研究成果

アイスランド語において *vera* (= *sein*) + 過

去分詞は状態受動だけではなく英語の *be* + 過去分詞と同様に通常の動作受動としても用いられているのに対し、*verða* (= *werden*) + 過去分詞はほとんど用いられていないことが分かった。結果状態を表さない *hafa* (= *haben*) + 過去分詞の例は少なくなく、かなりの程度完了形が発達していることが明らかになった。*vera* + 自動詞の過去分詞の例は見られたが、*koma* (= *come*) のような特定の動詞に限定されており、ドイツ語のように新しい動詞が作られた場合にそれが状態変化を表す自動詞であるというような意味的特徴にもとづいて、新たに *vera* + 過去分詞の完了形が形成される可能性は低いと考えられる。

アイスランド語を英語やドイツ語といった他のゲルマン語と比較すると、一般的にはアイスランド語が古い語形をとどめて保守的であるのに対し、英語は古い形式の多くを消失させ先進的であり、ドイツ語はその中間に位置すると見なされているが、分析的構造としての動詞の文法範疇の発達という点ではその先進性および保守性が一致しないことが分かった。すなわち、英語が先進的、アイスランド語が保守的であると一般に言われるのは、主として名詞の性と格の表示が英語においては消失し、アイスランド語においてはそれがよく保たれているためであるが、そのような名詞の語形の領域における先進性と保守性は動詞の分析的構造の発達とは並行しない。

特に完了形の発達という点では、アイスランド語は英語よりも高い。ただし、最も先進的であるのは、現在完了形を一般的な過去時制として用いるドイツ語である。このことは、*Le Petit Prince* のドイツ語訳、英語訳、アイスランド語訳の比較において、時制に差異が生じる場合、おおよそ次のような三つのパターンに区分されることから明らかである。すなわち、

パターン : 仏語 : 現在完了形 = 複合過去 ; 独語、氷語、英語 : 過去形(例 : 仏 : *j'ai vu, une fois, une magnifique image* ; 独 : *sah ich einmal ein prächtiges Bild* ; 氷 : *sá ég einu sinni stórkostlega mynd* ; 英 : *I saw a magnificent picture* 「私は一度すばらしい絵を見た」)

パターン : 仏語、独語 : 現在完了形 ; 氷語、英語、過去形(例 : 仏 : *J'ai alors beaucoup réfléchi sur les aventures de la jungle* ; 独 : *Ich habe damals viel über die Abenteuer des Dschungels nachgedacht* ; 氷 : *Ég hugsaði þá mikið um ævintýri frumskóganna* ; 英 : *In those days I thought a lot about jungle adventures* 「その頃私はジャングルの冒険について色々考えた」)

パターン : 仏語、独語、氷語 : 現在完了形 ; 英語 : 過去形(例 : 仏 : *J'ai essayé mais je n'ai pas pu réussir* ; 独 : *Ich habe wohl den Versuch gewagt, aber es ist mir nicht gelungen* ; 氷 : *Ég hefði reynt, en ekki tekist* ; 英 : *I tried but I couldn't manage it* 「私はやろうとしてみたけれど、上手くできなかった」)

上のパターンから、現在完了形の発達の順序は、フランス語、ドイツ語、アイスランド語、英語の順であることが分かる。イディッシュやペンシルバニアダッチ、アフリカンス等で完了形が発展していることに鑑みると、一般に言語が外的要因により変化を被った度合いが高いほど完了形を発達させる傾向にあることがうかがわれるが、実際には古い形態を多く残すドイツ語の方が、古い形態を放棄した英語よりも完了形を発達させている。また、アイスランド語は名詞の領域では最も保守的であり、古い形態の多くをほとんどそのまま残しているが、完了形の発達においては英語よりも先進的である。そしてすでに13世紀のサガにおいてアイスランド語では完了形がかなりの頻度で用いられており、早い段階で、保守的な語形変化と先進的な動詞の分析的構造を併存させてきたことが分かる。これまでクレオールや周辺的な言語のように、歴史的に大きな変化を被った言語ほど完了形が発達するという考えられてきたが、歴史的に大きく変化しながら完了形がそれほど発達していない英語と、古い形を保ちながら完了形をよく発達させたアイスランド語を見ると、その従来の説は妥当ではないと言える。動詞の領域には名詞の領域とは異なる独自の発達があり、名詞の領域における保守性がその言語の保守性を意味するわけではない。

このような現象の原因は受動態における助動詞の選択と関連するのではないかと考えられる。すなわち、ドイツ語の sein + 過去分詞は自動詞においては完了形としても用いられる形式であり、英語においても古英語ではドイツ語と同じように状態の変化を表す自動詞は wesan/bēon (= sein) + 過去分詞によって完了形を形成した。しかし次第に wesan/bēon + 過去分詞は受動態を表す意味機能の比重を高め、完了形としては用いられなくなった。一方、ドイツ語においては sein + 過去分詞が中高ドイツ語までは状態受動のみならず、動作受動を表したが、次第に受動態を表す形式として werden + 過去分詞が中心的形式になるに従い、sein + 過去分詞は受動態表現としては周辺的な形式になっていった。その代わりに sein + 過去分詞は完了形としては依然として用いられ、動詞 sein の現在完了形が ist gewesen となるというように、非完了相自動詞からも作られ、むしろ古高ドイツ語から使用範囲を広げている。

そして、英語の have + 過去分詞がドイツ語の haben + 過去分詞よりも間接受動として用いられることも sein/be + 過去分詞の使用領域の違いと関連づけて説明できる。すなわち、be + 過去分詞の中心的機能が受動態である英語においては have + 過去分詞も受動態としてかなり用いられるということである。それに対し、sein + 過去分詞の受動態としての機能が弱いドイツ語においては haben + 過去分詞も間接受動としては英語ほどには用いら

れない。その代わりに、完了相というアスペクトから見て werden + 過去分詞に対応する bekommen や kriegen が間接受動として用いられる。また、英語において完了形がドイツ語ほどに過去時制化していないことも、be + 過去分詞や have + 過去分詞が受動態としての機能を強く持つことから説明できる。

すなわち、英語においては be + 過去分詞が受動態として定着した結果、have は be の他動詞形であるので、have + 過去分詞も間接受動としての機能を他のゲルマン語よりも多く負わされることになり、完了形として発達することが阻害されたということである。

実際、Le Petit Prince のドイツ語訳、英語訳、アイスランド語訳の比較においては、単に受動の助動詞が英語で be であるのに対し、アイスランド語では be に相当する vera であるが、ドイツ語では werden であるという違いがあるだけではなく（例：英：If they are properly raked out, volcanoes burn gently and regularly, without eruptions；氷：Ef þau eru vel hreinsuð brenna þau hægt og regulega, án gosa；独：Wenn sie gut gefeget werden, brennen die Vulkane sanft und regelmäßig, ohne Ausbrüche；仏：S'ils sont bien ramonés, les volcans brûlent doucement et régulièrement, sans éruptions「きれいに掃除されれば、火山はおだやかに規則正しく、噴火せずに燃える」）、英語で受動の be + 過去分詞が用いられる多くの箇所、ドイツ語やフランス語では一般的な「人」を表す man や on を主語とした能動態が用いられたり（例：英：Explorer's reports are first recorded in pencil; ink is used only after proofs have been furnished；独：Zuerst notiert man die Erzählungen der Forscher mit Bleistift. Um sie mit Tinte aufzuschreiben, wartet man, bis der Forscher Beweise geliefert hat；仏：On note d'abord au crayon les récits des explorateurs. On attend, pour noter à l'encre, que l'explorateur ait fourni des preuves；氷：Frásagnir landkönnuða eru fyrst skráðar með blýanti. Það er látið bíða að skrifa þær með bleki þangað til sannanir hafa verið lagðar fram「調査者の報告はまず鉛筆で書き留められる。インクで書くためには調査者による証明が出されねばならない」）、あるいは、再帰代名詞による再帰動詞もしくは代名動詞が用いられていることが分かった（例：英：Then the bells are all changed into tears!；独：Dann verwandeln sich die Schellen alle in Tränen!；仏：Alors les grelots se changent tous en larmes!；氷：Þá verða bjöllurnar allar að tárur!「そうなれば鈴はすべて涙に変わる」）、すなわち、英語の受動の be + 過去分詞の使用頻度自体が高いのであり、完了形の助動詞としての機能を捨てた be が受動の助動詞として機能を特化させたことが分かる。

それではなぜ受動態を表す形式がドイツ語では sein + 過去分詞ではなく、werden + 過去分詞になり、一方、英語ではそれが be + 過去分詞になったのかと言えば、英語の動詞は

全般にドイツ語と比べて完了相に傾いているためだと考えられる。すなわち、英語の be とドイツ語の sein は同義と考えられているが、アスペクトという点では be の方が完了的意味を強く持つため、静的状態のみならず、動的变化の受動をも表すことが可能になった。それに対し、ドイツ語の sein はあくまで非完了相であるので、sein + (他動詞の) 過去分詞は状態受動のみを表し、動作受動を表すようにはならなかった。また英語の動詞のアスペクトは完了相に傾いているため、別個に継続的事態を表すために be + ...ing の進行形も発達した。アイスランド語でも、進行形を表すための形として vera + að 不定詞があるので、基本的に動詞のアスペクトは英語に近いと考えられる。しかし、Le Petit Prince の比較においては、英語の be + ...ing の箇所の多くはアイスランド語で vera + að 不定詞ではなく、単純形で訳されていることを考えると、英語よりは非完了的であるかもしれない。その場合、動詞のアスペクトの傾向は英語が最も完了的であり、次いでアイスランド語、ドイツ語の順となる。そのように、ドイツ語では動詞が非完了相に傾いているため進行形を必要としなかった。現在完了形の発達は最終的に過去時制化を終点とするが、動詞が完了相であるかぎり、現在完了形は事態変化後の状態を表すことを第一の意味とするため、英語の現在完了形は純粋な過去時制にはなりにくかったと考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

嶋崎 啓、西・北・東ゲルマン語の諸相、日本独文学会研究叢書 081 ゲルマン祖語から現代ドイツ語へ - 歴史的発展における駆流とその反動 - 査読無、2011、pp.1-19

〔学会発表〕(計2件)

嶋崎 啓、ドイツ語現在完了形の通時的意味転換の構図、第20回ドイツ言語理論研究会、2013年12月14日、上智大学  
嶋崎 啓、現代ドイツ語における現在完了形の発展度合、日本独文学会西日本支部第64回研究発表会、2012年12月1日、福岡大学

〔図書〕(計1件)

福元 圭太、嶋崎 啓、大学書林、ドイツ語不定詞・分詞、2012年、pp.88-173

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：

種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

嶋崎 啓 (SHIMAZAKI, SATORU)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：60400206

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号：